

マスコミに「こころ」はあるのか？

にだいら
仁平

あきら
章

●連合企画局長・秘書室長

4月末より、夏目漱石の小説『こころ』が100年ぶりに朝日新聞に連載開始された。懐かしい気持ちとともに、多感な高校時代の感動が蘇ってくる。一人の女性をめぐる親友との葛藤、そしてどうしようもない衝動による裏切り行為と親友の自殺。その真相を誰にも語れずに、悔恨の日々を送り、最後は自らの命を絶つというストーリーは、現在も古さを感じさせない。まさに、不朽の名作だ。

『こころ』のテーマは、エゴイズムであろう。人は、ものごとを都合よく解釈して、見たいと思うものを見る一方、不都合なものからは目をそらしがちだ。ただ、それを見ている「もう一人の自分」が心の中に存在している。だから、人は悩みながら生きているのだ。

話が飛躍するが、ある記者とこんなやり取りをした。

「なぜ、斜に構えた記事を書くのか。正確に報道してほしい。」

「一般大衆が知りたいことをわかりやすく伝えるのが仕事だ。ちゃんと取材はしている。」

連合でマスコミ対応の仕事をするようになって1年半になるが、戸惑いを感じることも少ない。

3月の春季生活闘争の報道では、「官製春闘」という見出しが躍った。政府に言われたから、経営側は賃上げ回答をしたのだろうか？

「政労使会議」の取りまとめには、「賃金は個別労使間の交渉を通じて決定するものである」と明記されている。また、デフレ脱却・経済の

好循環という点では、中小企業や非正規で働く者の賃金底上げが進むか否かが焦点であるはずだ。一部の経営者の断片的な発言を取り上げ、政府のお手柄だというのは、あまりに短絡的ではないだろうか。

また、労働者派遣法や労働者保護ルールの変更の動きを阻止すべく、連合は、4月18日にデモや集会など大規模な大衆行動を行った。しかし、その翌日に報道されたのは、これに関するものではなく、「連合メーデーに安倍総理出席の方向で調整」という記事であった。「労働組合が、労働分野の規制緩和に反対するのは当たり前過ぎて面白くない。自民党への接近の方がニュースになる」といった記者の声が聞こえてきそうだ。何を報道するか、マスコミには報道の自由がある。しかし、私たちの将来を左右するという点からすれば、メーデーに誰が来るかということより、労働者の代表抜きで議論されている労働法制の動向にこそ注意喚起をはかるべきではないのだろうか。

売れる記事を書くことはマスコミのエゴイズムだとは言いきれないが、その報道が与える影響ははかりしれない。労働組合とマスコミが、それぞれのエゴをぶつけ合っているのは、何も生まれない。より多くの記者に労働運動への理解を深めてもらうとともに、労働組合自らも積極的に情報発信していく努力が必要だ。「働くことを軸とする安心社会」の実現に向けて、私のできるところから、「こころ」の通じ合う仲間を増やしていきたいと思う。